

国家の存在根拠としての神社 地域の生存拠点としての神社 -「海の熊野」を事例として-

2013.11.14 卒業論文発表会
中谷研究室 <千年村>研究ゼミ
1X10A100 田熊隆樹

神社	丸山茂	熊野
海の熊野	神内神社	民間口承

第1章 本研究について

■研究目的

建築史家の丸山茂(註1)は「神社建築の形成過程における官社制の意義について」(註2)において、<神社は国家によって、在地の宗教伝統の一部分に基礎を置いて成立した>ことを主張した。つまり「神社」は、古くからその地域にあった場所、信仰、儀礼が国家の創始した「官社制」(註3)によって体制化・形式化されることでつくりられ、「国家の一部である」というモニュメントとしての意味をもって現れたのである(天武朝に創始したという官社制はまともしたものとして927年の『延喜式神名帳』(註4)に見られる)。

丸山の説を前提とすれば、[神社には国家的側面・地域的側面という二つの側面があるのではないか]という認識を得ることができる。本研究ではそれを神社の<二重性>と考え、その認識を具体例を通して確かなものにし、神社の根幹をなすものとしての<二重性>の意義を明らかにしていくことを目的とする。

■研究方法・論文構成

[文献精査]と[フィールドワーク]の二つの方法で行う。第1章で丸山茂の説を確認し、それ以前・以後の研究もふまえて本研究の位置づけを行う。第2章では熊野の概要を示し、「海の熊野」の概念を用いて研究調査地の属する文化圏を明確にする。第3章では調査した7つの神社を紹介し、地図・文献精査によって神社のもつ二つの側面を明らかにする。第4章では神内神社について、口承から神社の成立経緯についての二つの仮説を提示し、第3章において文献をもって示したことを裏付ける。第5章では神社の<二重性>について改めて定義を行い、その発生過程をモデル(模式図)で示し、現在まで残存する神社の<二重性>の意義を考察する。

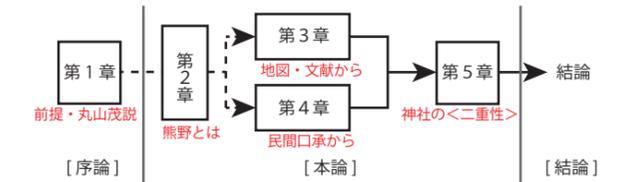


図1 論文ダイアグラム

■既往研究と論文の位置づけ

丸山茂の論文「神社建築の形成過程における官社制の意義について」に焦点をあて、それ以前・以後の研究を参照する。そして<神社は国家によって、在地の宗教伝統の一部分に基礎を置いて成立した>という丸山の主張を前提として、林一馬(註5)の述べるところの「神社の形成のむしろ多様な可能性」である地域的側面をも重要視して進めていく。以上より本研究の位置づけは丸山の大胆な説を補強し、具体的事例を通して神社の<二重性>を明らかにしていくものである。

第2章 熊野地方と「海の熊野」

本章では本研究の調査地である熊野地方について、その範囲・語源・地理・宗教を通してその概要を述べ、さらに熊野を出雲・伊勢と比較することで<南方文化の入り口として>・<伊勢に対する宗教観のもう一つの脈として>という古代国

家に対する熊野の意味を確認した。また、宗教学者・五来重(註6)の提唱した「海の熊野」(註7)の概念を用いて調査した7つの神社の属する文化圏の特徴を、黒潮の流れが運んでくる文化・信仰を概観することによって明確にした。

第3章 「海の熊野」の7つの神社

ここでは実際に調査した7つの神社についてその概要を紹介し、地図・文献精査から「国家の存在根拠として」・「地域の生存拠点として」という神社の2つの側面を対比的に見た。

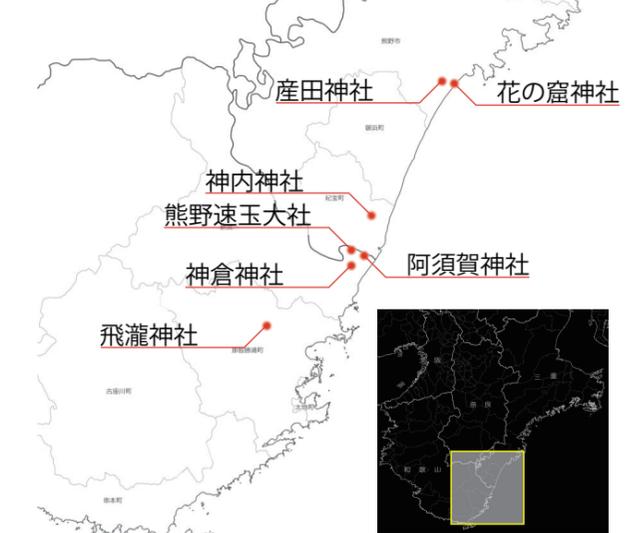


図2 紀伊半島南東部と調査した神社のプロット



■国家の存在根拠として

[3-2-1. 神話に描かれる場所]ではイザナミの死と結びつけられる花の窟神社について、朝廷の<伊勢方面との結びつきに伴う熊野との結びつき>という現実利害を述べた。また神武東征と結びつけられる神倉神社について、朝廷側に協力した人物で当時の熊野の有力者「高倉下」の存在を述べた。以上から、**朝廷による聖地の選定**があったことがわかった。

[3-2-2. 社格のある神社]では式内社・国内神名帳所載社(註8)・国史見在社(註9)について文献精査をし、**朝廷・国府の管理がなされることで神社は国家的側面をもち始める**ことがわかった。

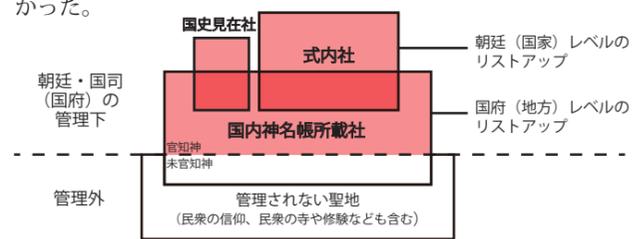


図6 国家によって管理される神社とされない聖地 模式図

■地域の生存拠点として

ここでは7つの神社の立地・祭・習俗など8つの具体例に関して地図・文献を精査した。ここではそのうち2つを記す。

[3-3-1. 立地と遺跡の分布]では、調査した神社のほぼ全てが2つの地層をまたがるように分布すること、**縄文海進**(註10)時の海際に立地すること、多くは縄文や弥生の遺跡を伴うことがわかった。そして「水の近く」への分布はその**聖性・交通・生業から考えられる**ことがわかった。

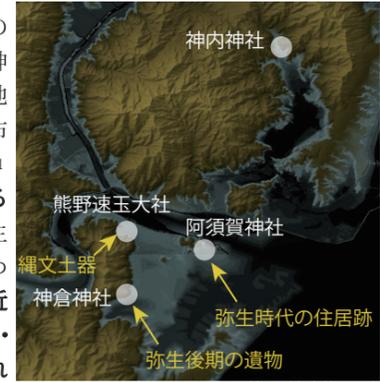


図7 熊野川河口周辺の地形(海岸線+3m)

[3-3-2. 熊野速玉大社例大祭]では、神馬渡御式・御船祭からなる例大祭について、その意味を考察した2つの説(熊野神降臨伝承の復演説、水霊祭祀起源説)を参照し、この祭の基層の部分に「**地域の世界観**」が存在することを確かめた。特に水霊祭祀起源説については、古代、人々の生存の上で切実な問題であった「治水」(註11)に着目し、この地域で熊野速玉大社だけが式内社となった理由を「治水」におけるこの場所の重要性から考察した。そこから「**地域の世界観**」の中の重要地の上に「**国家の世界観**」が覆いかぶさることの妥当性を見出した。さらに「**地域の世界観**」の中では各々の神社が互いに関係し合いながら存在していたと考えられ、社格の有無は国家が持ち込んだもの(「**国家の世界観**」)であることを[3-3-8. 社格のない神社]で強調した。



図8 熊野速玉大社例大祭・御船祭の様子

このように、第3章では地図・文献精査から**国家的・地域的な神社の<二重性>**を見出すことができた。

第4章 民間口承の残る神内神社に見る<二重性>

本章では調査した神社の1つである神内神社について、フィールドワークによって得た口承を記し、中でも神内神社成立以前に存在したとされる2つの聖地「古神殿」・「聖社」に注目した。それらが平安時代初期に神内神社に変わったという口承から、神内神社の成立経緯について<国家による「直接的」な神社化>と<修験者を介在する「間接的」な神社化>という2つの仮説を立てた。そしてそのどちらの仮説をとっても神社の成立に際して「**地域の世界観**」に「**国家の世界観**」が付与されたものと見ることができ、神内神社には**地域的側面・国家的側面の両方が二重に見られる**ことがわかった。ゆえにこの民間口承は、第3章で地図や文献精査を通して考えてきたことを裏付けるものであることがわかった。

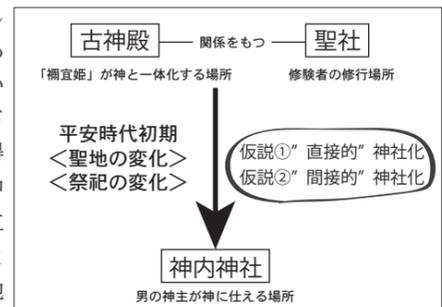


図9 神内神社口承における<聖地の変化>模式図

ゆえにこの民間口承は、第3章で地図や文献精査を通して考えてきたことを裏付けるものであることがわかった。

早稲田大学創造理工学部 学部4年

第5章 考察・神社の<二重性>

■神社の<二重性>

第3章では地図や文献から、第4章では口承から神社のもつ**国家的側面・地域的側面**を見てきた。ここで神社の<二重性>を改めて定義する。

神社に<二重性>があるとは、「**国家の存在根拠として**」・「**地域の生存拠点として**」の二つの意味があるということである。そしてこの<二重性>によって神社は、朝廷(管理する側)が変化しようとも、「**地域の生存拠点として**」存在し続ける。つまり<二重性>は**神社の根幹をなす性質**なのである。

■<二重性>の発生

民間(地域)の聖地の中からいくつか引き上げられ(国家の利害関係によって選別され)ることによって「**国家の存在根拠として**」神社とされ、社格をつけられ、神話の中で位置づけられる。この時はじめて**神社の<二重性>**が発生する。しかし地域の祭礼などで聖地間のつながりは消えず、「**地域の生存拠点として**」の意味は残る(図11)。図12は**国家・地域の世界観**を表した地図モデルである。

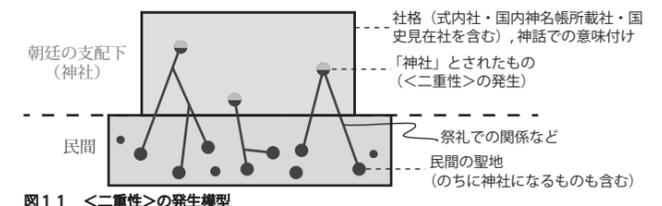


図11 <二重性>の発生モデル

■現在の神社

現在でも多くの神社が日本神話に登場する神や国家鎮護の八幡神などを祭神としている。と同時に、地域ごとの祭をもち、末社として地主神が祀られることがある。これは、**古代に発生した神社の<二重性>**は**現在にまで残存している**ということである。図13は現在の神社の状況のモデルである。

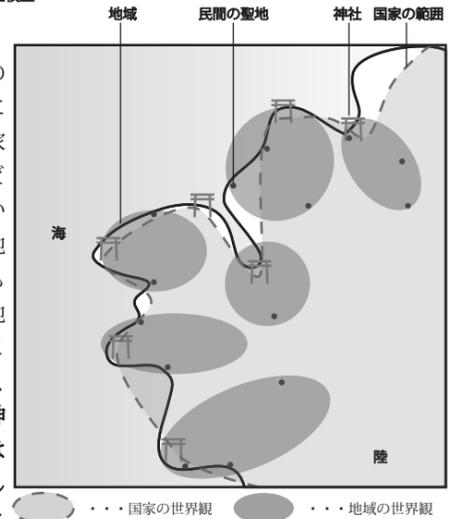


図12 「国家の世界観」と「地域の世界観」の重なり

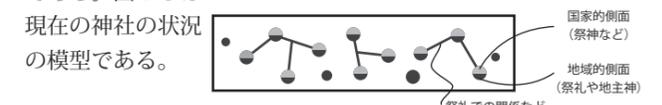


図13 現在の神社の状況

結論

神社には「**国家の存在根拠として**」・「**地域の生存拠点として**」という二つの意味、つまり<二重性>がある。そしてその<二重性>こそが神社を神社足らしめているものであり、古代に発生したこの<二重性>は現在にまで残存し続けているものであることがわかった。

Undergraduate student, school of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.

国家の存在根拠としての神社 地域の生存拠点としての神社

—「海の熊野」を事例として—

目次構成

▶序論

第1章 本研究について

1-1. はじめに

1-2. 研究の目的と方法

1-3. 論文の構成

1-4. 既往研究と論文の位置づけ

1-4-1. 神社の発生について-従来の研究

1-4-2. 丸山茂説

1-4-3. 丸山茂説の評価と以後の研究

1-4-4. 本研究の位置づけ

▶本論

第2章 熊野地方と「海の熊野」

2-1. 熊野とは

2-1-1. 範囲

2-1-2. 熊野という地名

2-1-3. 地理

2-1-4. 熊野の宗教

2-2. 熊野と国家

2-2-1. 文明文化の入り口 - 出雲との比較

2-2-2. 国家にとっての<反の世界>- 伊勢との比較

2-3. 「海の熊野」について

2-3-1. 黒潮の流れに乗って

2-3-2. 常世信仰

2-3-3. 補陀落渡海

2-3-4. 漂着信仰

2-4. 小結

第3章 地図・文献から見る<二重性>

3-1. 調査した7つの神社

3-1-1. 神倉神社

3-1-2. 阿須賀神社

3-1-3. 熊野速玉大社

3-1-4. 神内神社

3-1-5. 花の窟神社

3-1-6. 産田神社

3-1-7. 熊野那智大社別宮飛瀧神社

3-2. 国家の存在根拠として

3-2-1. 神話に描かれる場所

3-2-2. 社格のある神社

3-3. 地域の生存拠点として

3-3-1. 立地と遺跡の分布

3-3-2. 熊野速玉大社例大祭

3-3-3. 那智の扇祭

3-3-4. 葬所としての花の窟

3-3-5. 産土神について

3-3-6. 阿須賀神社の徐福伝説

3-3-7. 漁民たちのヤマアテ

3-3-8. 社格のない神社

3-4. 小結

第4章 民間口承の残る神内神社に見る<二重性>

4-1. 神内神社に伝わる口承

4-1-1. 神内集落について

4-1-2. 神内神社

4-1-3. 「古神殿」と「聖社」

4-2. 口承が語ること

4-2-1. 仮説① 国家による " 直接的 " な神社化

4-2-2. 仮説② 修験者を介在する " 間接的 " な神社化

4-2-3. 神内神社の<二重性>

4-3. 小結

第5章 考察・神社の<二重性>

5-1. 神社の<二重性>

5-2.<二重性>の発生

5-2-1.<二重性>の発生過程の模型

5-2-2. 現在にまで残る<二重性>

5-3. 小結

▶結論

第6章 結論

あとがき

謝辞

参考文献

図版出典

■註釈

註1：建築史家。1981年東京大学工学系研究科建築学博士課程修了。現在跡見学園女子大学教授。

註2：『建築史学』第33号（建築史学会,1999.9）で初出

註3：官社として神社を登録すること。官社とは、祈年祭に神祇官から幣帛（神に奉獻するものの総称）を受ける神社。

註4：正確には延長5年（927年）にまとめられた『延喜式』の巻九・十のこと。官社とされた全国の神社一覧。延喜式に記載された神社のことを式内社といい、全国で2861社。記載されていない神社のことを式外社という。

註5：建築史家。長崎総合科学大学教授。

註6：1908-1993。宗教学者・民俗学者。

註7：五来重の提唱した概念で、熊野における山の文化圏（「山の熊野」）に対する海の文化圏のこと。

註8：『延喜式神名帳』が神祇官によって作成されたものであるのに対し、各国の国司が作成した神社リストを『国内神名帳』という。

註9：『延喜式神名帳』には記載されないが、六国史（『日本書紀』・『続日本紀』・『日本後紀』・『続日本後紀』・『日本文徳天皇実録』・『日本三代実録』）には見られる神社のこと。

註10：縄文時代に日本で発生した海水面の上昇のこと。現在より海水面が約3m高かったとされる。

註11：洪水などの水害を防ぎ、また水運や農業用水の便のため、河川の改良・保全を行うこと。

■図版出典

図1：筆者作成

図2：国土地理院の白地図を元に筆者作成

図3～5：筆者撮影

図6：筆者作成

図7：基盤地図標高変換で筆者作成

図8：植島啓司『世界遺産 神々の眠る「熊野」を歩く』（集英社新書,2009）

図9～13：筆者作成